

## 父の間<sup>ま</sup>

福島県立葵高等学校 二年 満山 志帆

言葉の端々に感じられるのは、柔らかい息遣い。控えめな微笑みは、いつでも優しさをたたえている。

私は、父より寛大で心穏やかな人知らない。父の心には、凧いだ海が広がっているようで、喧嘩はおろか、ぼやくことさえない。いつも他人に対して腰が低いから、父は頼りなくも見える。

父と話すときはきまって時間がかかる。ゆっくりで、たまにプツンと言葉が途切れる会話は、他人からしたらひどく悠長なものに見えるだろう。だが、私は父との会話を面倒だと思ったことは一度もない。父の独特の話し方には、聞く人の心を和ませる暖かさがあるからだ。父は話すことが苦手なわけではない。むしろ、自分の意見や知識を伝えたい。学習塾を一人で経営していることから、人と話すことや教えることが好きなのだ。

父は、どんな時でも自分の「間」を持っている。食事をする時の「いただきます」でさえ、他の家族よりワテンポ遅い。気の強い母は、そんな父がへまをすると「間抜けなことをして」といらだつが、実際の父の失敗は全て「間」がありすぎることによって起きるような気がしてならない。電話口で返答が遅くなって相手を困惑させてしまったり、飼い猫二匹の喧嘩を口を半開きにして見ているだけで止めるタイミングを失ったりしている。

しかし、そんな父の「間」が消える時もある。父は、父の母、つまり私の祖母と話をする時だけ早口で、少し落ち着きがない。私がそのことに気がつき始めたのは、今から四年程前のことだ。

そのころから、祖母が徘徊を繰り返すようになった。気に入った商品を何度も買って溜めるようになった。家族の名前を間違えるようになった。私があの時、認知症という病名を知らなかったわけではない。ただ信じたくなって知らないふりをしてきた。今思えば、両親も同じだったのだろう。日に日に祖母の状態が悪化する中、誰も心構えができていなかった。夜中に家から出て行った祖母を探して連れ帰った父にいつもの「間」はなかった。息は荒く、表情が歪み顔は紅潮していた。

私は驚いた。誰にでも自分のペースを崩さない父が焦り、祖母を探すのに大声を出して走っていたのだ。もちろん、父が焦るのは無理もない。実の母の行方が一時分からないう状態だったのだから。それでも、父がペースを乱してがむしゃらな行動をとるというのは意外だった。そんな父を初めて見たのだ。

祖母の介護に慣れた現在でも、父は祖母に関わる時、雰囲気がからりと変わる。祖母の症状を病院で説明するときには、医師が質問をする隙もないような速さで話すし、終始あれこれと慌ただしく祖母の世話をする。まるで別人のようだ。父のその穏やかなたたずまいを乱せる人は祖母一人だけ。それは父の、祖母への愛情の表れだと思う。

私達は皆、誰にも干渉されることのない、その人だけの「領域」を持っていると思う。具体的には、息を吸って吐く呼吸の頻度とか、一つのことを考える時間の長さ、痛みや苦しみを感じる程度などだ。これらには、人それぞれの個性や性癖が色濃く出ている。その「領域」は恒常的なもので、普段は特別にその存在を意識することはない。

だが、その一方で、これらが大きく変化することもある。それは、他者と関わる時だ。父が祖母を大切に思って、いつもの「間」を失ってしまうように、無意識で普段とは違う自分が現れる。その相手は、どんな意味であれ「特別」な存在なのだろう。父が、母である祖母に向ける愛情は他の誰にも向けられるものではない。

誰もが当たり前前に持っていて、自分一人では変わることも、変わりたいと思うこともないもの、人と人との関わりにおいて初めて認識される「領域」が、「間」と呼ばれるものではないか。人間は、人「間」と書く。そのように、人間は他者との関わりの中で生活している。皆がそれぞれの「間」を持つことで多様な社会が築かれたのだろう。人々はお互いの「間」を受け入れ、「間合い」をはかって生きてきたのだ。

しかし、最近の傾向としては、多くの人が自分の「間」を失い、周りの流行に流されている。私自身、皆が着ている服や、話し方を真似したくなる。また、自分の好みを率直に言えず、周りに合わせてしまうことが多い。

そんな中で自分の「間」を持って、無理に他人に合わせようとしないうちに、私は憧れる。私は、父の「間」が好きだ。父の沈黙も、話の中でそっと息をついてこちらに向けらるまなざしも暖かくて、和やかだ。父の「間」には、いつも変わらない愛情が満ちている。

私も自分の「間」を大切にしたい。それが周りの人と少し違ったものであったとしても、私だけの大事な個性だと思うから。